

山に親しみ山に想う(15)

— 加藤文太郎の故郷 —

<文・写真> =岡本=

孤高の単独行者、加藤文太郎の故郷は、植村直己と同じ但馬の国である。加藤は日本海に臨む漁村の浜坂町(現在の新温泉町浜坂)、植村は円山川沿いの農村の日高町(現在の豊岡市日高町)の出身である。最寄りの駅は、加藤が山陰本線浜坂駅、植村が江原駅である。植村直己の故郷には 2017 年 6 月に訪れたが、その前年の 6 月に加藤文太郎の故郷浜坂を訪れて、加藤文太郎記念図書館と加藤文太郎夫妻の墓地に寄る機会を得た。

実家の最寄駅である江原駅から城崎まで特急に乗り、各停の浜坂行きに乗り換える。乗り換えの時間待ちの間に城崎温泉郷の風情を楽しんだ。城崎から約 1 時間、途中日本一高い鉄橋のある余部(あまるべ)を經由して正午前に浜坂駅に着いた。町の顔であるべき駅頭の様子は、人影のない駅前通りの入口に「浜坂温泉」の垂幕がかかっているだけの、地方の田舎町の一つという印象である。

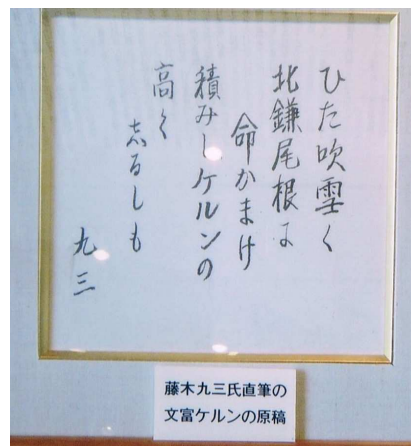
明治 7 年創立の浜坂小学校跡碑の近くにある案内所で街の地図をもらって加藤文太郎記念図書館に向かう。駅前通りを少し進み右折すると、疎水程の細い味原川沿いの「あじわら小径」に出る。小径沿いの家並みは、時代を幾つか遡ったような雰囲気を出している。浜に向かって小径を少し歩くと、加藤文太郎記念図書館が右手に現れる。駅から徒歩 12 分程の距離である。記念図書館前の青々とした田んぼの背後に本流の岸田川が流れ、その先に文太郎が子供の頃に遊んだ、石仏群のある観音山(標高 245m)が文字通り優しく座している。



新温泉町立加藤文太郎記念図書館は、加藤文太郎を顕彰して設立され1994年10月に開館した。正面から見ると、中央天井から採光する吹き抜け部分を頂上と見做し、左右にゆるやかに傾斜した山容をイメージした外観になっている。一階には一般図書コーナーなどがあり、二階は加藤文太郎資料室と山岳図書閲覧室(蔵書約3600冊)になっている。二階に上がると、正面に文太郎のレリーフ(槍ヶ岳を背景にした胸像)が掛かっており、陳列ケースの最初には遭難現場に建てられた「文富ケルン」の藤木九三直筆原稿が展示されている(注1)。陳列ケースには文太郎が愛用した次のような登山用具が展示されている。

- ・ いびつになった牛革製登山靴(28.5cm)
- ・ スキー3式(美津濃製ヒッコリー、ノルウェー式フィットフェルト式締具)
- ・ ストック(マダケ製長さ130cm、リング直径16cm)
- ・ ピッケル(日本製金属部分長さ16.5cm、櫛のシャフトの長さ85cm)
- ・ アザラシの毛皮シール・アイゼン・ワカン・飯盒(アルミ製)・カメラ(ドイツ製)
- ・ 神戸市在住時の表札(木製)
- ・ 神戸ロッククライミングクラブ(RCC)の会員証(銅板)・登山手帳(年月日、時間、天候、場所等記載、地図の他コメントもある)
- ・ 地図(陸地測量部のもの)
- ・ 北鎌尾根での遭難報道スクラップ

じっくり時間をかけて展示物を拝観した。望むべくもないが、何か一つぐらい直接触れられる物が展示されておればと思った。



遅い昼食をとった後に向かった文太郎夫妻の墓について記す前に、文太郎遭難の前後について触れたい。文太郎ら一行四人は槍ヶ岳に向った。1936年1月2日に文太郎は同僚吉田と槍頂上を極めて槍肩の小屋に戻り、翌3日昼食後に槍を超えて北鎌尾根に向かうと他の二人(大久保、濱)に伝えて小屋を出た。その直後から猛吹雪になった。他の二人は、加藤、吉田の出発後に槍平に下ろうとしたが、吹雪のため槍平に行けず槍肩の小屋に戻った。北鎌尾根に向った文太郎らは戻ってこなかった。吹雪は4、5、6と続き7日におさまった。他の二人は7日に下山したが、加藤、吉田の消息不明は続いた。二人の遺体は4月26日になって天井沢を遡っていた松本高校生によって発見された。1936年5月1日付大阪毎日新聞は「国宝的山の猛者 槍で遭難 死体発見さる 去る一月来消息絶った加藤他一名 四月ぶりにこの悲報！」の見出しで報じた(注2)。

大阪毎日新聞
昭和十一年五月一日
去る一月来消息絶った加藤氏ほか一名
四月ぶりにこの悲報！

國寶的山の猛者
槍で遭難、死体発見さる

神戸市歩行會員三菱重工業技師加藤
文太郎(○)鑛道倉庫取工場鍛冶場職
吉田工吉田登美久(○)および大久保 濱の
氏 田 四氏ほか一名は昨年十一月廿一日、槍ヶ岳
(上) 氏 田 四氏ほか一名は昨年十一月廿一日、槍ヶ岳
プス槍ヶ岳へ(登山、積雪、一、二、三日間の
小屋に滞在、うち大久保、濱氏は小屋に残り他の一名は下山、加藤、吉田両氏は松井強力とともに頂上を極
めるべく同日出發したが、折からの猛吹雪のため松井強力は両氏を見失ひ自來行方不明
となつてゐたが四月後の廿七日、それらしい一腐爛死體を北日本アルプ(高橋入天井澤
附近で発見したので廿九日歩行會員濱氏ほか二名が首實檢の結果加藤氏を判明、更に附
近を捜査の結果卅日午後一時吉田氏の死體も発見された(大町町に連絡があつたので大町對山で遺體

加藤文太郎は、遭難死の前年 1935 年 1 月 16 日に下雅意花子と見合い結婚し、同 11 月 14 日に長女登志子を授かった。文太郎は同 12 月 29 日「帰る頃には目が見える様になっているかなあ」といって槍に出かけた。文太郎の花子夫人と長女登志子との結縁は悲しいほどに短いものだった。「遅くとも 5 日に帰る」と言い置いて槍に向った文太郎を待っていた花子夫人は、「6 日の明け方、うとうとしてしまいました時に…」「私が編んだセーターを着て元気のない彼が手ぶらで帰ってきました…」という夢を見たという。花子夫人はこの夢見の 6 日を文太郎の命日にされたという。

地図を頼りに文太郎の墓を探したところ、浜坂街区の中心部にある高見墓地の一隅に在った。広い墓地をうろついた末、「孤高の人加藤文太郎」と書かれたら2m以上の白塗り角柱を目にして漸く墓にたどり着いた。「加藤家之墓」の傍に高さ1メートル半程の変哲もない加藤文太郎夫妻の墓碑が建っている。墓碑の正面には「雄山俊哲居士 花苑智芳大姉」と陰刻され、裏面には「冬山登山中槍ヶ岳北鎌尾根ニテ遭難ス 昭和十一年一月六日 加藤文太郎 行年三十一才」と刻まれている。加藤家之墓と文太郎夫妻の墓の墓前には香華の供えはない。自分は何をしに来たのか。ただ探して眺めに来たのか。線香の一本も持参しなかったことを慚愧した。合掌。文太郎の浜坂在住当時の生家はすでに無く、建て替えて甥が住んでいたが、そこも数年前に廃屋になってしまったという(記念図書館司書の話)。

浜坂には文太郎所縁の碑が他に「加藤文太郎ふるさと碑」と「新田次郎文学碑」があるが、帰りの汽車便の都合もあり、訪問は割愛した。加藤文太郎ふるさと碑は、浜坂漁港の西側高台に郷土の自然石を使って1970年8月に建てられ、「不撓不屈の岳人加藤文太郎ふるさと碑」と刻まれている。

新田次郎文学碑は、漁港東側の海浜近く、ふるさと碑を見上げる位置に1990年12月に建立された。碑には小説「孤高の人」の一節で文太郎が観音山から浜坂を眺め下ろす情景の部分が描かれており、「その底辺の中間あたりに加藤の生家の赤い瓦屋根がはっきり見えた」とも刻まれている。新田次郎は「孤高の人」を書くにあたって花子夫人と文太郎の会社同僚だった遠山豊三郎より資料の提供を受けたが、文太郎の性格や人間像を知る上で、また「孤高の人」を執筆する動機付けの点で文太郎と一度だけ会ったことが大きく作用したという。新田次郎は要旨次のように述懐している。「35年も前のことである。中央气象台に勤務し、富士山観測所に交替勤務のため冬の富士山に登る途中、文太郎と会って、二言三言言葉を交わした。自分らは五合五勺に泊まって二日ばかりで登ったが、文太郎は一日で登った。平地でも歩くような速さで歩いて行った。天狗のような奴だと云いながら見送った。この時文太郎と会っていなかったら、おそらく筆をとらなかったと思う。小説の中で時々使った不可解な微笑みも五合五勺の避難小屋でみた文太郎の顔つきである。」(注3)。



加藤文太郎の故郷訪問と題したからには、文太郎が故郷である但馬、山陰の山々を深く愛していたことに触れないわけにはいかない。文太郎は「私は兵庫県と鳥取及び岡山県の山脈を兵庫アルプスと云い、海拔1510.1メートルの氷ノ山を兵庫槍、三室山を兵庫乗鞍、一番南の1344.6メートルの山を兵庫御嶽と呼んでいます。扇ノ山は頂上が全部鳥取に入っているから、この山の前山を兵庫立山と云う事にしました。」と「単独行」の「兵庫立山」の項で、その冒頭に書いている。その他に、1200m以上のピークについて兵庫大天井(鉢伏山)、兵庫白馬(仏ノ尾)、兵庫鷲羽(三ツヶ谷)、兵庫白山(三國ヶ山)などと記している。冬季積雪期訓練のため幾度も縦走した但馬妙見山と蘇武岳については、標高が1200m以下であるためか兵庫云々とはしていない。浜坂を流れる岸田川は兵庫黒部川と称していた。文太郎の兵庫アルプス登山歴を概観すると、主に1月から3月の積雪期に氷ノ山―鉢伏山(5回)、但馬妙見山―蘇武岳(6回)の積雪期縦走を行っている。文太郎は故郷の山を愛するが故に、兵庫アルプスの名称を付すとともに、日本アルプスの冬季登山の訓練の場として、故郷での積雪期縦走に取り組んだと言える。文太郎は兵庫乗鞍、兵庫御嶽などの登山を終えて汽車で職場のある神戸に戻る際に「養父駅を離れて行きます。私はアア兵庫アルプスよ、四千尺よ、アア御嶽よ、乗鞍よ、焼よ、また会う日までと泣かずにはいられませんでした。」と記す程に故郷を愛していたと言える。

(注1) 原稿文面「ひた吹雪く 北鎌尾根よ命かまけ 積みしケルンの 高く志るしも 九三」。

「文富ケルン」の「文」は文太郎の文で、「富」は吉田富久の富であるが、吉田は登美久を筆名にしていたといわれる。

(注2) 同紙の小見出しには「全国の峻険を単独で征服 名だたる加藤氏」「哀しき逸話 同伴者と登山したのが皮肉・死の門出」「遺児を抱いて夫人ら急行す 涙つきぬるすたく」とある。

(注3) 文太郎は「単独行」の中で、1933年11月の富士登山の際に「この日早朝出発した観測所の人々の後を追った。…三合目付近で皆に追いつき簡単に挨拶をした。そのとき案内人らしい人が僕に「一人で案内もつれないとは無謀ではありませんか」という。」と書いている。五合と三合の食い違いがあるが、この時に加藤と新田の邂逅があったのであろう。文太郎は1925年にも富士登山をしているが、8月であった。 (了)

<主な参考資料>

- ・ 「新編単独行」加藤文太郎 ヤマケイ文庫 2010年11月刊
- ・ 「孤高の人」新田次郎 新潮文庫 昭和48年2月刊
- ・ 「孤高」加藤文太郎記念図書館 平成23年9月刊
- ・ 「わたしたちの町の誇り 不撓不屈の岳人加藤文太郎」加藤文太郎山の会 2011年3月刊